

北 どころ

第32号 2018年11月1日（毎月1日発行）

旧三上郡三十三か所霊場② ふるさとへの巡礼地を訪ねて

観音信仰が盛んだった江戸時代中期頃から、全国各地に手軽に巡拝できる代用の巡礼地が誕生した。三上郡三十三か所霊場もその一つ。三上郡とは庄原市（合併する前の旧庄原市）が誕生するまでの庄原町、敷信村、本田村、高村を一括した藩政時代の郡名である。

第四番札所 本村おつけ堂

をしなければすくいとらんとおつけ堂たのみたのまぬ人をへたてず

その庶民信仰の地を実際に調査した記録が「旧三上郡三十三か所霊場探訪記」（以下探訪記と略称）で、ふるさと研究会によって一九八三年に冊子として編纂された。それから三十五年の歳月が流れている。札所を巡拝しながら、現在の姿をレポートします。



所在地は庄原市本村町、第三番札所の岳音寺に行く途中の、中国自動車道の下をくぐる隧道の手前に、俗称オツツケ堂はある。「古文書には御付堂とか追付堂とか書かれているが、伝説にいう当地の岩月城主が敵の追手を逃れて堂に入ったということからの名称とも考えられる。」（探訪記）



御詠歌の額面はかなり傷んでいるが、現在も堂内に掲げられている（左上写真）。

近所の高齢の方に話を聞かせてもらったが、山の方に共同墓地があったときは、墓参りの行き帰りに、このお堂に立ち寄って観音様に参拝する人も多かったそうだ。しかし、共同墓地がなくなつてからは、訪れる人もほとんどいなくなつてしまったという。

第五番札所 宝珠山月貞寺

山河をてらすもきよき月貞寺
かげはくもらぬ心にぞすむ

（月貞寺の仏さまの教えが月の光が野山を照らすようにくまなく届いているよ。信仰のおかげというものは清らかな



月貞寺（上）と裏山の八十八か所霊場の石仏（左）

心にこそ現れるものなのだ

所在地は本村町、宗旨は真言宗御室派、本尊は観世音菩薩。「本村町に古くから伝わる市無形文化財の古切講踊は、この月貞寺に勢揃いして請雨経をあげ一同が踊り、午前八時蘇羅彦神社へ向かつて出発した。」（探訪記）

御詠歌の額面は、本堂正面入口のガラス戸後ろの上部に掲げてある。現在の住職は庄原市山内町の薬師寺の住職が兼務していて、訪問時は不在で話を聞くことはできなかった。ユニークなのは、先々代住職のつくった四国八十八か所霊場のミニ版が裏山にある。

八十八体の石仏を札所に見立てて巡拝する。所要時間は約四十分と入り口の標識に書いてあった。観音霊場の他にも御大師様の霊験にも触れられるという贅沢な場所だ。

第六番札所 上谷 上河内堂

かみがーち

わけ入れば深谷かくれに道有て玉のうてなにむかううれしさ

(けわしい山の中に入ってしまったって次の霊場に向かう小道をやっと見つけたときの歓びはこの道こそ浄土に続く道にちがいないと思うほどうれし気持ちになるのだ)

県道庄原東城線から本村川を渡り、廃校を利用した上谷



コミュニティセンターからさらに三百メートルばかり進んだところに建っている。堂内の棚に御詠歌の額面が石仏と共に安置されている。近くに上河内という屋号の家があったというが、この土地の地名が上河内だったかもしれないと、探訪記では推測している。上谷歴史研究会の藤川廣明さん、上田輝馬さんに案内してもらった。上田さんは探訪記を編纂したふるさと研究会のメンバーでもあった人だ。「この堂は、上谷を通行する人の休息場所でもあり、地域にとっては集まりや盆踊り等の行事に使用する重要な場所でもあったのでしよう」と、研究会の会報の「上谷川」で藤川さんは書いている。



新・図書館員ノート「思い出の一冊」⑧ 『しろくまちゃんのホットケーキ』

読書の秋。食欲の秋である。今回私の思い出の一冊として紹介する本も、とってもおいしいそうなホットケーキが出てくる、わかやまけんさんの『しろくまちゃんのホットケーキ』（こぐま社）だ。1970年発売以来のロングセラーを続ける「こぐまちゃんえほん」シリーズの1冊である。しろくまちゃんとお母さんが一緒にホットケーキをつくるお話。卵を割つ



て、牛乳を入れてよくかきまぜる。小麦粉とお砂糖とふくらし粉を加えてまぜたらフライパンへ。このホットケーキがだんだん焼けるページが見開きで、「ぶつぶつ」、「ふくふく」と楽しい擬音とともに描かれている。

大人になつて読んでみてもすごい！見事に焼ける場面が描かれているなど感心させられる。うちの母もおやつによくホットケーキを焼いてくれた。絵本と一緒に表面がぶつぶつしてくるなあと思ったのをおぼえている。食べたあとは、ちゃんとおかたづけする所も描かれている。

今年ふくやま文学館で「えほんはともだち」こぐま社絵本展を見に行った。こぐまちゃん、しろくまちゃんと共にあのページが見事に再現してあり感動！ああ、ホットケーキが食べたい！

(三次市立図書館員によるリレーエッセイ、執筆者の似顔絵は有光館長作)



柳田国男『妹の力』

——古来の女の存在感に着目

本書を読み返ししながら、「しまった」と思いました。消化するには相当の予備知識を必要とするからです。民俗学に熱を上げていた若い日には、大して気にならなかった個々の知識について、今は記憶が薄れ、難解な書となっていました。でも、その当時の感動は今も生きていたので、要約して伝えたいと思います。

日本の「民俗学の父」である柳田国男の業績は多方面にわたりますが、第29回掲載の『木綿以前の事』と並んで、女性の大きな存在感を説いたのがこの『妹（いも）の力』（創元社、1940年刊）です。戦前に書かれたものですが、今も古くはなっています。

この本の魅力は2つあります。ひとつは、「近世儒教の法則は、特に女性に向かって過酷であった」（柳田）ため、隅に追いやられてきた女性の存在を、古来の確固とした位置に押し戻そうとしたことです。もうひとつは、民俗学の方法によって対象を解明する手さばきを、遺憾なく開示してくれていることです。

題名にある「妹」を「イモ」と呼ぶのは、古くは男を「兄（セ）」としたのに対して、女全体を指します。

古今東西の文学にはたくさんの名作があります。そんな名作の中から筆者の心に残る作品を今の青年たちにも読んでもらいたいと思い、毎月1冊ずつ紹介しています。

また読んでみたい本③2

青年たちに

音谷 健郎



【創元社版の表紙】

第32回は、柳田国男の『妹の力』です。もし興味を持ったらぜひ読んでみてください。

筆者紹介：1944年、旧・庄原町生まれ。新聞記者、大学講師を経て現在、庄原市東本町在住。大阪文学学校講師

備へて居たといふ『さかしさ』『けだかさ』、それを取り返すこともほんの「冒頭の「妹の力」の項では、「イモ」の力の源泉に言及しています。柳田によると、戦前のこの時代まで、男と女の関係は、「ぶつきら棒の

と砥石が割れ、釣り竿、天秤棒をまたぐとそれが折れると云ふやうに、男子の膂力（りよりよく）と勇猛とを以て成し遂げたものを、たやすく破壊し得る力があるものの如く、固く信じて居た名残に他ならぬ」と明快に述べています。

別の言い方では、「女の力を忌み怖れたのも、本来は全く女の力を信じた結果」としています。女の力が強い沖縄やアイヌの古くからのしきたりを挙げています。

ところで、柳田民俗学は、口承文芸と民間伝承を手がかりに常民の生活史を明らかにしているのが特徴です。が、口承といった輪郭の曖昧なものでもいいのだろうかとの疑問が湧きます。これにも、応えてくれます。その場合、比較的読み易いのが「稗田阿禮」考です。「稗田阿禮は女だった」との説を裏付けるために、各地の神社や様々な伝承を渉猟しています。対象を解き明かすのに、このようにおびただしい事例と知識を駆使していることに驚かされます。

私たちが郷里の伝承を探るとき、どのような手続きがあるのか、しっかりと教示された気になります。

今回は、宮本常一『家郷（かきょう）の訓（おしえ）』を取り上げます。

「イモウト」の語法は平安時代からといます。

柳田の姿勢は、「序」で述べられています。「過去の精神文化のあらゆる部面に互（わた）って、日本の女性は実によく働いて居る」「名も無い昔の民間の婦人たちが、屢々（しばしば）

応答するのが、父でも夫でも男たちの普通の態度であった」として、その原因を考えます。

「（女たちを）きたないとか穢（けが）れるとかいふ語で言い現はして居たけれども、つまりは女には目には見えぬ精霊の力が有って、砥石を跨ぐ

水牛

——葬式が蕩尽（とうじん）といわれるわけ

音谷健郎

インドネシア中央部のスラウエシ（旧称セレベス）島では、水田で労役をする水牛を見かけますが、タナ・トラジャ地方に来ると水田に水牛の姿を見ることはありません。水牛は、農家の庭先や草地で寝っ転がっているのを見るだけです。悠々と歩いて、自然の風景の玉顔顔です。

古い伝統が生きるタナ・トラジャでは、水牛は死者を天国に送り届ける聖なる乗物なのです。生者が死者に供与する供物（くもつ）なのです。だから、水牛が活躍するのは死者の葬礼の時です。しかも、大きく立派な牛を従えると、ゆったりと速くに天国に運ばれるという信仰があるのです。何十頭と多くの水牛が供せら

れます。有力者の葬礼では、おびただしい水牛が殺され、肉が分配されます。最近では、2011年、有力者の葬礼で370頭余、2003年、236頭が供与された記録があるといえます。

トンコナンの正面玄関には、犠牲となった水牛の頭が、重ねてぶらさげられています（写真Ⅱ左上）。ただし、これは死者一族の社会的威信を示すだけではないのです。一族が負債を背負った証でもあるのです。

どういふことかと言うと、ここも贈答文化の引力圏にあつて、水牛を贈られたら、贈った家に葬礼があると同じ様な水牛で返礼しなければなりません。古来、文字を持たないこの地方では、こ



の水牛の頭が証文でもあるのです。私たちにはどれも同じに見えますが、トラジャの人たちの目には、どの水牛の頭は誰が贈ったものなのか、分かるのだそうです。こうして、答礼が成り立つと水牛の頭は、軒先から外されます。

町では、水牛の市場（写真Ⅱ左下）がたちます。斑（まだら）で角（つ）が立派なのが一番人気で、日本車の車の値段並なのだそうです。次が、

灰色、そうして黒、という順だそうです。同じ黒でも、角の立派なものや毛並みが美しいものなど等級があるのです。

こうして、葬式が派手になるので、死者が出てもすぐには葬礼は出せません。何ヶ月か先なのはざらで、2年先、3年先というのが多いのだそうです。役所が仲立ちして、数件の合同葬になるケースもあるのです。

その間はどうしているのかというと、死者はトンコナンの北の一室で家族とともに過ごすのです。しかも葬礼がおこなわれるまでは、死者ではないのです。「熱い人」と呼ばれ、病人に類似した扱いなのです。陰膳のようなものが備えられるそうです。死者ではないので家人が人前で泣くことは出来ません。葬儀になって始めて、人目をばからずに大声で泣くことができるのです。

トラジャ地方の葬礼の派手さは、「蕩尽」という言葉を当てたくなります。他の地方の人からは、「トラジャ人は葬式のために生きている」と言われています。背景には、このような死生観があるからです。

今回の旅では、葬式に出会わず、話を伝え聞くだけでした。生々しい報告が出来なくて残念です。



どら書房の店主が毎月オススメ本を3冊選んでご紹介します。

「シーラという子」

トリー・L・ヘイデン 著 早川書房

虐待されたある少女の物語、の副題。3歳の男の子を連れだして、木にしぼりつけて火をつけた6歳の少女シーラ。裁判所は州の精神病院に入院させる裁定を下したが、小児病棟に空きがなく、トリーが受け持つ特別学級に通ってくることになる。敵愾心が強くすぐに暴発するシーラに、心身に重い障害を持つ他の生徒たちはパニックに――。



家庭内暴力、貧困、性的虐待……、ハリネズミのように心を閉ざした少女が、一人の教師の粘り強いアプローチによって、生来の利発さを発揮するようになる。感動のノンフィクションだが、教職とはここまで献身的でなければならないのかと衝撃を受けたのも確か。

「約束の地」

樋口明雄 著 光文社

WLP(環境省野生鳥獣保全管理センター)の八ヶ岳支所長として赴任した七倉は、昔気質の猟師との軋轢、急進的な動物愛護団体との対立、娘の学校でのいじめ等々、問題山積の中で奮闘。しかし、人間を襲う巨大熊や巨大猪の出現、WLPのメンバーの不可解な死と、重大事件が発生する。

猟師の高齢化や荒廃した山林、野生動物による農業被害、不法投棄による環境汚染……、待たなしの危機感がWLPという架空の組織を誕生させた。しかし、小説の中でもWLPは苦闘続きだ。共生の「約束の地」へ至る一すじの光明を、骨太の人間ドラマでしっかりと描いている。



「十八の夏」

光原百合 著 双葉社

朝顔、金木犀、ヘリオトロープ、夾竹桃、花を題材にした4つの短編が収録されている。表題作の「十八の夏」は、2002年に日本推理作家協会賞(短編部門)を授賞。年上の女性に憧れる浪人生という青春ドラマのような設定だが、すべてが伏線になっている。ベースにけっこうヘビーなりキュールを使っているが、見た目も後口もすっきりさわやかなカクテル、そんな感じ。一気に飲むと悪酔いする。



経歴を読むと、詩や童話がスタートだという。情感豊かな表現に、なるほどなと納得。最後の作品では、広島市の市花が重要な役割をする。ただし、残念なことが一つ。作者はどうもタイガースファンらしいのだ。

どら書房 << 貸本屋システム >>

- ・ 店内で販売した本は、どら紙幣(店内専用通貨)であれば半額、現金であれば3割で買い戻します。※破損や汚れがあれば値引
- ・ 書籍購入⇒読了⇒どら紙幣と交換⇒新たな書籍購入、貸本のような感覚でご利用ください。

虫と草木と人びとと②〇 中村慎吾

「風土記時代の中国山地の植物・その三」

著者紹介…一九三一年、比婆郡(現・庄原市)比和町に生まれる。農学博士(九州大学)。昆虫や動植物などの自然科学、郷土史や民俗学を含めた博物学の研究者で、著書は多岐にわたる。

※中村さんの回想録的なコンセプトで編纂された「虫と草木と人びとと」(シンセイアート出版)から、著者の許可を得て、その一部を抜粋、転載しています。

出雲国風土記に記されている杉も現在のようない種植されたものでなく、落葉広葉樹林の中に混じる天然杉であり、ヒノキやスギの人工林はまだ見られない自然のなりゆきにまかせた植生が広がっていたものと思

われる。常陸国風土記の読みくだしで櫟をイチイとしているが、櫟は一般にクヌギを指す。櫟は一般にはるのが正しいと思う。柴は一般には燃料に用いた広葉樹を言う。従って燃料とした広葉樹はクヌギ以外に多



ササユリ(飯沼愨齋著、牧野富太郎再訂増補「増訂草木図説」、図書刊行会版による)

いので柴をクヌギと同定するのは正しくない。柞(ははそ)はコナラのこと、鶏頭樹(かえるでのき)はカエデ類―カエデの総称である。従って、常陸国行方郡の山野は針葉樹のイチイはなく、コナラ、クヌギ、クリ、カエデ類、それにシデ類が混じる落葉広葉樹林に覆われ、その中に天然のヒノキが混じっているような植生ではなかったかと考えられる。

出雲風土記には総計九十一種の植物が記されている。飯石郡と仁多郡からそれぞれ三十四種がとり挙げられているが、両郡に共通しているものは十五種、率にして約四十四パーセント、過半は異なっている。同じ

自明のことで、薬用植物が中心になっているのだから植物相を反映していないのも当然のことと言える。榆(にれ・ハルニレ)は吾妻山周辺にも多いのに仁多郡からは記事がなく飯石郡に限って記されており、百合(ゆり・ササユリ・嬰麥(なでしこ)・カワラナデシコ)は各地に普通に見られるのに仁多郡に限ってとり挙げられているといった例から、選択に当たって好みや知識が反映し、優占していると考えられるわけである。

中国山地の北面を占めているところで共通性が少ないのは、風土記をまとめた役人の好み(?)や彼等がもっていたと思われる知識の反映であろう。植物を物産として選んでいるのだから好みや知見が優先することは

まず共通している植物の内容は、建築用材のスギ、松(クロマツとアカマツの両種を指すが、中国山地の場合はアカマツと同定される)、槻(つき・ケヤキ)の三種、衣料に利用されたと考えられる藤(ふじ・これはヤマフジとノダフジの二種と同定される)、蚕の飼料植物の柘(くわ・ヤマダワ)、紙の原料の楮(かじ・コウゾ)、染料植物の紫草(むらさ

き)、嗜好品と思われる李(すもも)の他はすべて薬用植物で、そのうち百頭公(オキナグサ)と框(かえ・柏・カヤ)の二種は延喜式に出雲国より貢進させた薬草と重複している。これら十五種の中でムラサキは既に絶滅してしまい、石斛(いはぐすり・セッコク)やオキナグサは近年著しく激減し、セッコクの場合、鑑賞用として乱獲され絶滅寸前である。スモモは中国産の落葉樹でいつ日本へもたらされたかは定かでない。出雲国風土記を見ると、どの郡からもスモモが記録されているのに、同じ中国産でありながら梅は大原郡に限って記録されているところから考え、かなり古い時代に日本へもたらされた、嗜好品(?)・果樹として珍重し、栽植されていたものと思われる。今でも中国山地の山深く恐らく人のたたくまいがあったと思われるところにスモモの老樹を見ることができ、それらは当時の人びとによって広がっていたスモモたちの末裔かも知れない。建築用材のスギは現在すべて栽植のもので、中国山地では芸北山地の一部に天然杉が残っているだけである。



オキナグサ
(口和町竹地谷、1996年4月29日、小川光昭氏撮影)

老いの雑記帳⑨ 「偉い」と「馬鹿」

誰が偉いか

誰も偉い

誰が馬鹿か

誰も馬鹿

それが人間

八十路まで生きて来て、やっと人を見る目が肥えてきた。その結論が冒頭に書いた今の心境なのだ。

若い頃は「偉い人」と「馬鹿な人」を単純にその人の存在だけで判断していた。特に子供の



頃は大臣、大将、県知事、校長などは自分とは無縁のエライ人に見えた。その反対に大人でも喧嘩ばかりしている人を見ると「バカな人」としか思えなかった。しかし、社会人となって多くの人と交わるようになって、人間の心の内側がチラチラ見えるようになってきた。それまでエライ人だと思っていたのに、時に非常識な言葉を吐いたり、他人を蹴落とす行動に出たりするとバカな人だと思ってしまう。

ローテンプルクの町並みを歩いていると、通りに面した建物の二階部分に等身大の七人の彫像が並んでいた。聞けば美德・悪徳の象徴だと言う。人間というものは誰でも美德と悪徳を兼ね備えているという聖書の教えだそう。偉い人でも悪心を持ち、馬鹿な人でも善心はあるということだ。ならば人間にはエライもバカもない。

「思いのままに、我が心の雑記帳」(鈴木澄夫著)より

マツダスタジアムはぎつしり満員、期待と不安がないまぜになった緊迫感が、開戦前のスタンドを覆っている。

三打数0安打、一三振。これが日本プロ野球におけるおれの一軍での成績のすべてだ。今年は春先の自主トレで膝を痛めてしまい、二軍戦にも数えるほどしか出場していない。内心、覚悟はしていたが、球団から自由契約を言い渡されると、自分の顔から血の気が引くのがわかった。野球馬鹿のおれが、これから何をすればいいんだ……。

野球界から追い出された男が、こうしてのんびりと日本シリーズを観戦している。しかも、自分で希望したことなのだ。

「先生、今日はありがとうございます。無理をしたんじゃないですか？」
自分でも乏しい伝手（ツテ）をたどってみたが、プラチナチケットとになっている入場券を手に入れることはできなかった。

「教師生活三十三年と七カ月、たくさん卒業生を送り出してきました。球団関係者にも教え子がいます。今回は特別に、その関係を利用させてもらいました」

松下というこの老教師は、陰でヒ

ノマルとあだ名されていた。中学の課外授業で、屋外で一緒に昼飯を食べる機会があった。松下先生の弁当は、白米に梅干しだけの見事な日の丸弁当だった。それを堂々と、本当にうまそうに食べるのだ。

「でも、プロ野球選手になったのは君一人だけです。ぼくの、いや、学校の誇りです」
大真面目にそう言われて、おれは

を目に焼き付けて、きっぱりと見切りをつけたかったんだと思います。おまえは負け犬なんだと、自分で納得したかった……」

老教師の強張った顔を見て、こんな愚痴は言うべきではなかったと反省した。

試合は対一の膠着状態で終盤に入りました。五回の広商の得点は、江川にとつては実に百四十二イニングぶりの失点でした。広商は八回、ツーアウト一、二塁からダブルスチールを敢行、それがキャッチャーの悪送球を誘って二塁ランナーが生還、広商が勝ち上がったんです」

怪物と呼ばれた高校時代の江川の剛腕伝説は、新聞雑誌の記事で知ってはいるが、おれが生まれる遙か前の話だった。

「そして優勝戦、広商・佃、横浜商業・永川の息詰まる投手戦で、試合は0対0のまま延長戦に突入、結局、広商は二対三で敗れて準優勝に終わります」

甲子園出場という勲章のないおれには酷な話題だった。

「打倒江川、夏こそ優勝が広商のストーリーガンに変わりました。広商は夏の甲子園でも順調に勝ち上がって、決勝戦で静岡高校と対戦します。江川の作新学園は、二回戦で銚子商業に敗れています。その決勝戦で、九回裏のサヨナラスクイズという広商野球で見事優勝を飾りました」

おれはしらけるばかりで、ビールを舐めるように飲んでいた。

「それから何日かたって、夏休みも

「負け犬」

あきふゆひこ
亜木冬彦

現代御伽草子 ③〇

※県北の歴史や風物を題材としたフィクションです。

逆に落ち込んだ。

「どうしておれが日本シリーズの試合を見たかったのか、試合前の練習を見ていてわかりました。心のどこかに未練があったんでしょね。おれはまだ二十五です。膝の怪我が治ってガンガン練習したら、またプロ野球の世界に戻ってこれるんじゃないかと、心のどこかで思っている自分

がいる。最高峰の舞台での凄いプレー

た。名前は知っているが、軽妙な口調の解説者というイメージしか持っていない。

「二九七三年の春の選抜高校野球に、江川を擁する栃木の作新学園が登場して、順調に勝ち上がっていきました。準決勝で対戦したのが、広島県立広島商業高等学校野球部、そう広商です。ソフトバンクの達川光男ヘッドコーチが在籍していたチームです。



残り少なくなってきた頃、広商野球部の練習試合が、県北にある高校のグラウンドで行われました。対戦相手は広島県立庄原実業高等学校野球部、野球ではまったくの無名校です」

野球留学で、県内の野球部の有力校から誘われなければ、自分が通っていたかもしれない高校だった。

「全国制覇した広商が、どうして県北の田舎町まで来てくれたのか。それは、夏の高校野球の県予選で、広商が庄原実業と対戦しているからです。下馬評は選抜準優勝の広商の絶

対有利、しかし、広商打線は庄原実業の下手投げエースに苦戦して延長戦に突入、試合は十三回の裏、庄原実業の攻撃でツーアウト、ランナー一塁。バッターの打球は左中間を破って外野を転々、誰もがこれで広商の夏は終わったと思いましたが」

紙コップのコーラを少し口に含んで、老教師は唇を湿らせた。

「しかし、奇跡……、いや、庄原実業にとっては悪夢が起きました。サヨナラのランナーの足が、サードベースを回ったときにもつれたんです。スピードがガクンと落ちてホームベースでタッチアウト。息を吹き返した名門は十四回表に一点をもぎ取って勝ち上がり、そのまま全国制覇に突き進みます」

松下先生の言いたいことがわかってきた。

「あのときの死闘を乗り越えたから広商は優勝できたのだと、感謝の気持ちで県北の片田舎まで来てくれたのです」

試合には必ず勝者と敗者がいる。脚光を浴びるのは勝者ばかりだが、敗者にも存在意義がある……。両チームのメンバーが揃わなければ、試合すらできないのだ。

「ちなみにその練習試合は、一方的

に打ち込まれてボロ負けです。でも、全国制覇した広商と試合ができただけで光栄です。万年球拾いの補欠だったわたしにとっても、たとえ試合に出ることができなくても、あの試合は特別でした。手加減なしで戦ってくれたことが嬉しかった……」

ヒノマルは少しも変わっていない。おれが授業中に居眠りして、注意されて逆上したことがある。「こんなもん勉強して、何の役に立つんじゃ」、大声で叫んでいた。学校の勉強なんかしなくても、おれはプロ野球のスター選手になるんだと本気で信じていた。

そのときは絶句して何も答えることはできなかったヒノマルだが、翌日の授業で様々なデータを読み上げながら、勉強することの大切さをこんこんと説いてくれた。その内容は忘れてしまったが、おそらく徹夜したのだろう、真っ赤に充血したヒノマルの目を今でも覚えている。

大歓声がわき起った。いよいよ試合開始である。

(気の抜けたプレーをしたら、遠慮なくヤジるからな)

いつの間にか屈託は霧散して、試合を愉しんでいる自分がある。

まつの古本屋さん どら書房

古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

- ・ 無料本、百円本、50円本などのコーナー。無料の漫画ルームもあります。
 - ・ 地元のポストカード、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。
- ※九日市の開催日は定休日でも開店します。

- 庄原市中本町 2-1-10
- 定休日：毎週月・火曜日
- 営業時間：9:30~19:00
- TEL：090(9913)3052

※広島銀行庄原支店の手前（三次側から）※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

< 広告料 1/4 ページ 1回 2,000円 半年間 9,000円 1年間 15,000円 >

どろろくる俳壇

そぞろ寒一人転倒一人起き

近藤 昌平

乳色の霧の底なる目覚めかな

竹地 恵美

栗御飯たんとあります御代わりを

原 博己

かの世よりこの世短し曼珠沙華

片岡 正人

故郷やたわわの柿がなりしまま

隆 愚

イカロスの合金の翼五里霧中

赤川 冬人

投稿&寄稿

「銭湯の思い出」 M・A

テレビでニュースを見ていたら、この前の台風で、大阪の銭湯が大きな被害を受けていることを報じていた。猛烈な台風の連荘で、建物が損壊してしまったらしい。あの高くそ

びえる煙突が、無残に折れてしまった銭湯もある。

それだけ台風が強烈だったということだが、メインテナンス不足も影響していたようだ。内風呂が当たり前のようになってお客が減少、施設の管理にお金をかける余裕がなくなってしまうのだらう。

私が子供の頃は、庄原市内にも銭

※投句を歓迎します。

湯があった。確か、二軒あったと記憶している。利用したのは、家の風呂が壊れたときの二回だけ。小さかったので、母親に連れられて女湯に入ったような、湯気の中のおぼろげな記憶が残っている。

銭湯が身近になったのは、東京のアパートで一人暮らしを始めたときで、風呂付のアパートは家賃が高くて手が届かない。風呂はおろか、トイレも共同といった古いアパートがたくさんあった。かぐや姫の「神田川」の歌詞がまだリアルな時代だった。

当時の銭湯は、二百円でお釣りをもらえた。夕方の四時に開店して、終わりは十二時まで。十一時までに行かないと入れてもらえない。いつも混雑していたという印象があった。洗い場のガラんが全部、埋まっていることも少なくなかった。

帰りが遅い日が続くと銭湯に行きそびれて、体の方は濡れたタオルで拭くなどしてどうにかなるが、髪の毛が汚れて頭が痒くなってくる。今日はどうしても風呂に入るんだと、銭湯まで走ったことも懐かしい思い出だ。

東京や大阪のような大都市でも、後継者不足もあって、銭湯はどんど

ん数を減らしているという。すっかり斜陽産業になってしまった。私が最後に銭湯に入ってから、もう四半世紀が経っている。

しかし、大きな湯舟に体を浸したときの開放感は格別で、今でもときどき庄原・簡保の宿の温泉に入りに行く。子供の頃は風呂嫌いで、入ってもカラスの行水だった。

父親がまだ生きていた頃に、簡保のお風呂と一緒に入ったことがあるのだが、ほんの五分で出てしまったのは閉口した。せつかくお金を払って入ったのだから、大きな湯舟に手足を伸ばしてのんびりしたい。私が大の風呂好きになったのは、銭湯のおかげである。



どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など
情報掲示板です。

一 硬式テニス参加者募集 一

MTEC (Miyoshi Tennis Enjoy Club)

場所：三次運動公園の屋内&屋外コート

- ・火曜日 (9:30 ~ 12:00)
- ・水曜日 (9:30 ~ 12:00)
- ・土曜日 (10:00 ~ 12:00)

連絡先：中川 (☎080-5610-2376)



今年もやります！庄原空市

今年も、「庄原空市～パン日和～」

日にちは、12月2日(日)10時から。

場所は、庄原市民会館です。

ハンドメイドマーケット、ワークショップ、
こだわりのフードショップに加えて、パン
屋さんがきますよ！どら書房も絵本をメイ
ンに参加します。

詳細はフェイスブックの「庄原空市」で。

(<https://www.facebook.com/庄原空市-416470545063969/>)

《情報&原稿を募集します!!》

- 仲間募集
 - 教室&講座案内
 - イベント情報
 - あなたの大切な本の紹介
 - ボランティア・ライター(現地記者)募集！
- ※応募先はどら書房・赤川まで。
掲載は無料です。

どらくろあ ホームページ

バックナンバーも掲載して
いるので、ダウンロードして
お楽しみいただけます。



<http://shobara.wix.com/dorakuroa>

一 絵本の無料レンタル 一

イベントや集会の時などにお使いく
ださい。

「箱貸し」します。

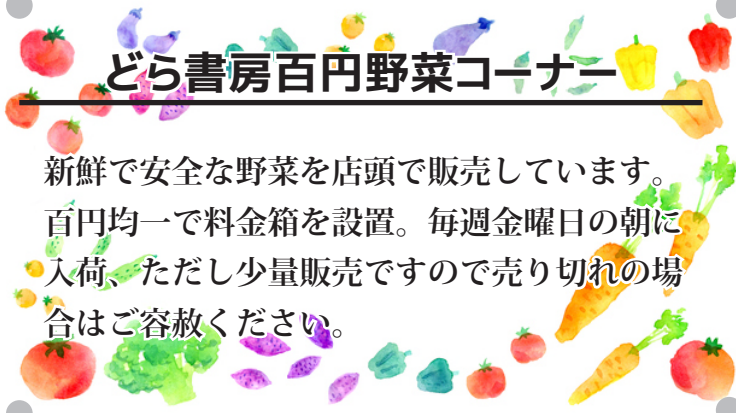
図書館の除籍本や販売には難のある
本ばかりなので、破損しても大丈夫
です。

ご希望の方はどら書房まで。

どら書房百円野菜コーナー

新鮮で安全な野菜を店頭で販売しています。

百円均一で料金箱を設置。毎週金曜日の朝に
入荷、ただし少量販売です。売り切れの場
合はご容赦ください。



発行：どら書房
〒727-0012
庄原市中本町 2-1-10
☎090(9913)3052(赤川)
e-mail: touzin@sannet.ne.jp
年間購読料：2,000円(郵送費込)

誌面デザイン: ROUTE183
協賛：九日市愛好会

◇日本シリーズの開幕前に、この編集後記を書いていませを感謝します。

◇古本屋をやっている、郷土史関係の本に関心がある人が多いことを実感しています。各地の郷土史研究会も盛り上がっているようですね。霊場巡りの企画が、その一助になってくれることを願っています。情報提供も継続してお願いします。

編集後記

◇巻頭の「旧三上郡三十三か所霊場」は現在、第七番札所の時貞寺(上谷町)まで取材しているのですが、すでに建物はなく、すでに、案内してもらわなければとでもたどり着けない場所でした。次回に掲載予定です。

第 214回

「庄原九日市」

平成30年

11月9日 (金) 9:00~13:00

「庄原九日市とは？」

天正年間(440年前)に物々交換で始まった市(いち)。昭和年代の戦争で途絶えていた市を、市街地活性化ボランティア活動として空き店舗などを活用し2001年に復活。

「TOPICS」

★市民ギャラリー「アート多愛夢」

➡ボビンレース作品展

とき：11月8(木)～10日(土) 10時～16時

★どら書房

➡九日市の日は営業します。
月曜日と火曜日はお休み。

★風龍

➡九日市スペシャル！餃子200円！

★楽笑座で「うた声喫茶」開催中。

「出店配置図」



① お休み

② タラワーフード

③ 昭助
とらち
二八そば加工所
アーミッシュ
さだっさ
佐藤食販
健康企画グループ

④ 郷屋
ぬくもり

⑤ ちくちくはうす玉手箱
工房アム
高野りんご・大根
⑥ Room of Keiko
めだかの学校
やまのおみやげや

⑦ 農 楽 会

⑧ さとちゃんち
開盛社
832gの奇跡

⑨ お休み
⑩ 克國水産
⑪ お休み

⑫ お休み

⑬ 山本水産
くんえん工房 香豚
ハナピラタケ広島

⑭ まなべ商事

⑮ 田崎屋
砂田海産
佐藤園芸
珈琲屋スプレモ
宮川屋

⑯ お福
どんぐりーず

出店申込みは、【毎月20日締切】コンパネ1枚スペース1,000円～ 九日市愛好会事務局
〒727-0013 庄原市西本町2-1-10 楽笑座内 TEL/FAX 0824-72-8285

ホームページ
<http://www.kunchi-ichi.jp>

